

育成期の飼養方法の違いが肥育成績に及ぼす影響

○木下正徳・藤田達男・梅木英伸
(大分農林水産研畜産)

【目的】

黒毛和種の飼養管理は一般的に繁殖経営と肥育経営に分かれている。繁殖経営体では子牛市場での有利販売のため発育を重視した飼養管理を行っているが過肥の子牛の肥育期における問題点も指摘されている。そのため、黒毛和種去勢牛の育成期における飼料給与法の違いが肥育期の飼料摂取量、増体及び肥育成績に及ぼす影響について検討した。

【材料及び方法】

2004年6月～2006年1月に平均生後6.5か月齢の黒毛和種去勢牛18頭を用い、各区試験牛を6頭配置し育成～肥育試験を実施した。試験区は育成期の粗飼料からのTDN給与割合50%区(I区)、40%区(II区)、30%区(III区)に区分し、育成期の濃厚飼料は市販飼料(TDN68%,CP16%)粗飼料は場内産牧乾草を使用し、肥育期の濃厚飼料は市販3飼料(TDN73～76.5%,CP13～8%)粗飼料は稲ワラ、場内産牧乾草、ビール粕発酵飼料を給与した。試験期間は育成期3.3か月、肥育期16.3か月飼養し、平均生後月齢26.0か月で肥育を終了し屠畜後枝肉調査を実施した。

【結果及び考察】

育成期間中の粗飼料からのTDN摂取割合はI区(47.5%)II区(36.8%)は計画をやや下回り、III区(33.6%)は計画をやや上回る結果となった。

乾物摂取量は有意差はないものの育成期はIII区が良好で肥育期はI区が良好であり(表1)、増体量は有意差はないものの育成期～肥育中期はIII区が良好であったが、肥育後期のなると他区よりも低下する傾向が見られた(表2)。

表1 乾物摂取量(1日1頭平均) 単位:k g

	育成期	前期	中期	後期
I区	6.49	8.17	8.27	7.53
II区	6.06	7.99	8.18	7.41
III区	6.74	8.12	8.26	7.42

枝肉成績を表3に示した。バラ厚と皮下脂肪厚でII区とIII区間に、歩留基準値でI区とII区間及びII区とIII区間に有意差が見られたが、I区とIII区間には各形質での差は見られなかった。しかし、枝肉性状ではIII区のロース芯周囲の筋間脂肪は他区より厚い傾向が認められた。

以上のことから、黒毛和種去勢肥育素牛の育成後期の飼料給与は粗飼料からのTDN摂取割合を45%程度としても、肥育時の発育及び枝肉性状が良好であることが示唆された。

表2 増体成績

	育成開始	育成終了	前期終了	中期終了	後期終了	肥育全期間
I区	205.3	299.0(0.94)	477.3(0.96)	634.3(0.89)	726.2(0.69)	427.2(0.86)
II区	201.1	291.2(0.90)	469.3(0.96)	625.0(0.88)	712.8(0.66)	421.6(0.85)
III区	208.5	309.3(1.01)	498.8(1.02)	666.7(0.95)	746.2(0.60)	436.9(0.88)

() は日齢増体量

表3 枝肉成績

	枝重	ロース面積	バラ厚	肝脂肪厚	歩留基準値	BMSNo	BCSNo	しまり	きめ	BFSNo
I区	461.1	55.2	8.0	3.3	73.3a	5.0	3.5	3.8	3.8	3.0
II区	460.6	51.7	7.8a	4.0a	71.9b	4.2	3.8	3.5	3.8	3.0
III区	473.5	55.3	8.5b	3.2b	73.5a	5.2	3.7	3.7	4.0	3.0

ab 異符号間に有意差あり (p < 0.05)